

最期を包む 温かな距離感

映画「人生をしまう時間」(下村幸子監督)は、在宅での終末期医療の現場を記録したドキュメンタリー。誰もがいつかは迎える最期のあり方を見つめ直したくなる作品だ。エッセイストの平松洋子さんにレビューを寄せてもらった。

平松洋子

庭先の百日柿が色づいてきた。肺がんを患い、自宅で布団に横たわったまま暮らす八十四歳の千加三さんが、診療に訪れた医師に言う。「そのうちもぎに来いよ」「お互いになんぼろうね」。柿が熟れた頃、娘や親戚たち、医師に見守られて千加三さんは息を引き取る。カメラは最期の一部始終を映

映画「人生をしまう時間」を見て

ひらまつ・ようこ 食文化と暮らし、文芸と作家をテーマに幅広く執筆。「買えない味」でBunkamura ドウモゴ文学賞、「野蠻な読書」で講談社エッセイ賞を受賞。近刊に『そばですよ』(本の雑誌社)など。

在宅での終末期医療 見つめるカメラ

しだす。目前の死から伝わってくるのは、しかし、どこか穏やかなぬくもりだ。映画「人生をしまう時間」は、埼玉県新座市「堀ノ内病院」の在宅医療チームの活動に密着したドキュメンタリーである。終末期医療の現場で、家族、社会、医療ができることはなにか。その答えが、二百日におよぶ記録のなかに用意されている。

人ひとりの人生には、きれいごとではすまない現実がある。不自由を抱えながら自室に籠もる九十三歳の男性。夫の献身的な介護を受けて気丈にふるまう妻。子宮頸がんの病状に苦しむ五十代の女性。全盲の娘の愛情を一身に受けるのは、百日柿が自慢の千加三さんだ。気性、家族関係、経済や住宅状況、周囲の綾なす感情……そのなかで医師、ケアマネージャー、訪問看護師らが連携し、支える。

ありのままのリアルな画面から目が離せない。医師が家族や本人の本音を引き出したり、不安を受け止めたり、笑顔をもたらしたり、つかず離れずの距離が温かい。在宅医療チームが家々に風を通し、地域を結ぶ役目も果たしているのだ。とかく実態の見えにくい「在宅死」「終末期医療」は、この医療チームにとって、人と人との親身な交わりを示すのだと、下村監督みずから話すカメラが語りかけてくる。

二人の医師が登場する。そのひとりが小堀嶋一郎医師。一九三八年生まれ、森嶋外の孫。東

大病院に外科医として勤務し、定年退職後、在宅診療医に転身した。

八十歳の飄々とした竹まいや言葉に接して、誰もが思うはずだ。なぜ、彼は最後の仕事を終末期医療に求めたのだろう。小堀医師が著した論考「祖父森林太郎」に、自身の真情を吐露する次の一文が記されていた。

「一言で言うならば、私の人生は対立する俗性と純粋性のバランスをどのように取るかにあつたと云っても過言ではない」(「鵬外」生誕150年記念号 森嶋外記念会)

おしまいの日々を生きる人々に余生を捧げることが「純粋性」の希求だとすれば、小堀医師の

生き方もまた鮮烈に浮上してくる。鵬外の遺言の文言を思いださずにはおられない。「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」

身にまといたい鍔かぶとを脱ぎ去り、世を去るときは郷里石見国の津和野で生を受けた一介の人間でありたいと願う鵬外の切なる思いは、住み馴れた家で人生をしまう人々の姿にますます響く。

命の終焉もまた、生の一部である。その瞬間まで生き切ろうとする人々に、本作は驚くべき率直さと共感をもって向き合う。親密なカメラのすぐ脇に、私たちも導かれる、私たちも寄り添っている。



「人生をしまう時間」 21日から、東京・渋谷のシアター・イメージフォーラムほか全国順次公開。2018年6月に放送され、大きな反響を呼んだNHK BS1スペシャル「在宅死「死に際の医療、200日の記録」をもとにした映画。新たなシーンを加え、劇場でじっくり見ることを前提に再編集がほどこされている。上映時間は1時間50分。小堀嶋一郎医師=写真左=は著書『死を生きる人びと 訪問診療医と355人の患者』(みすず書房)で今年、第67回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞。

文化

アート&エンタ